# 遠藤周作集

新潮日本文学

56

新潮社

© Syusaku Endo, printed in Japan 1969
口絵写真撮影　田沢　進
乱丁・落丁本は本社又はお買求めの
書店にてお取替えいたします。
**定価　800円**

**遠藤周作集　新潮日本文学 56**

昭和四十四年一月三十日　印刷
昭和四十四年二月十二日　発行

著　者　遠　藤　周　作
発行者　佐　藤　亮　一
発行所　株式会社　新　潮　社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　東京(03)二一一一（代表）
振替東京　八〇八

印刷所　大日本印刷株式会社
製　本　新宿・加藤製本所
本文用紙　三菱製紙株式会社
扉・見返・カバー用紙　特種製紙株式会社　表紙クロス　日本クロス工業株式会社　函用紙　日清紡績株式会社　製函　文京紙器株式会社

# 目次


海と毒薬　5
留学　92
沈黙　256
＊
アデンまで　392
白い人　408
黄色い人　448
男と九官鳥　487

私のもの 504
四十歳の男 515
解説 村松剛 530
年譜 543

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 遠藤周作集

# 海と毒薬

## 第一章　海と毒薬

八月、ひどく暑いさかりに、この西松原住宅地に引越した。住宅地といっても土地会社が勝手にきめただけで、新宿から電車で一時間もかかる所だから家かずはまだ少ない。

駅の前を国道が一本、まっすぐに伸びている。陽がカッと路に照りつけている。どこから来るのか知らないが砂利をつんだトラックがよく通る。トラックの上には手拭を首にまいた若い人夫が流行歌を歌っている。

泣いちゃ巻けない出船のいかり……
さすが男よ、笑顔で巻いて

そのたびに黄色い埃が濛々とまき上り、埃がおさまると道の両側から幾軒かの店がゆっくりと浮び上ってくる。右側には煙草屋と肉屋と薬屋とが、左側にはソバ屋とガソリン・スタンドとが並んでいるのだ。そうだ。それから洋服屋もあることを言い忘れていた。洋服屋は、ガソリン・スタンドから五十米ほど離れた地点にひとつだけポツンと建っているのだが、なぜこんな辺鄙な所をえらんだのかわからない。

トラックがまき上げる埃のために、紳士服御用と書いたペンキも、ショオウィンドオの硝子もすっかり白っぽい。ショオウィンドオの中には肉色の人形の上半身がおいてある。あやしげな衛生博覧会などによく陳列してある白人の男子人形だ。頭が赤く塗ってあるのは金髪のつもりであろう。高い鼻と青い色の眼をもったその人形は一日中、謎のような微笑をうかべている。

私が引越した月はひどく雨の降らない日が続いた。ソバ屋とガソリン・スタンドをつなぐ畠はすっかり罅割れて、水気を失った玉蜀黍の根の間でキリギリスが乾いたくるしそうな声で喘いでいた。

「こう暑くっちゃ、お風呂にはいりたいけれども」と妻が言った。「お風呂屋も随分、遠いのねえ」

風呂屋は国道を駅の反対側に逆もどりして三百米ほど歩いた所にあるそうである。

「風呂屋も風呂屋だが、医者はいないかね。俺も毎週一回は気胸を入れねばならんし――」

翌日、妻が医院をみつけて来た。風呂屋のすぐ近くに内科と書いた保険医の看板が出ているのを見たと言う。昨年、会社の集団検診で私は左肺の上葉に豆粒大の空洞を発見されたのだ。幸い肋膜が癒着していなかったので肋骨を切らずにすんだが、ここに来る前に住んでいた経堂の医者から半年の間気胸療法を受けていた。だから引越しをすれば、すぐ代りの医者を見つける必要があった。

妻に教えられた道をさがして、その勝呂という医院をたずねてみた。夏の西陽が風呂屋の窓硝子に反射して、近所の百姓たちの家族が入浴に来ているのだろうか、湯をながす音、桶をおく音がかすかに聞えてきた。それはひどく倖せな音のように私には思われた。医院は風呂屋の裏側に赤く熟れたトマト畠をはさんで、すぐわかった。

医院といっても公庫で建てたような小さなモルタル作りの家である。垣根らしい垣根もなく、陽に焼けただれた褐色の灌木をトマト畠との境にしている。まだ夕暮なのになぜか雨戸をしめきっていた。庭にはよごれた子供の赤い長靴が一足、落ちていた。あわれな犬小屋が入口にあったが、犬はいなかった。呼鈴を幾度も押したが誰も出てこない。私は庭にまわった。雨戸を少しあけて、白い診察着を着た男が顔をだした。

「だれ？」

「患者ですが」

「どうしたの」

「気胸をうって頂きたいと思いまして」

「気胸？」

医者は四十位だろうか老けた感じのする男だった。あごを右手でしきりにさすりながら、彼は私をぼんやりと凝視していた。西陽をこちらは背にうけているためか、雨戸をしめきった部屋はひどく暗く、その暗い影のなかでこの男の顔は妙に蒼黒くむくんで見える。

「今まで医者に見てもらったのかね」

「はあ。半年ほど空気を入れてもらいました」

「レントゲンは？」

「家においてきましたが」

「レントゲンがなかとなら仕方がない」

医者は、そう言ったきり、また雨戸をしめきってしまった。私はしばらくジッとそこに、たっていたが、家のなかからはかすかな物音も聞えなかった。

「変な医者だね」と私はその夜、妻に話した。「あれは変な医者だよ」

「患者を選ぶんでしょう」

「そうかも知れんな。それに言葉に妙な訛りがある。レントゲンがなかとなら——か。東京に長くいた人じゃないね。どこか地方から来た医者だ」

「とにかく気胸をいい日に入れて九州へ行って下さいよ。妹の式も九月に迫っているんですから」

「うん」

けれども私はその翌日も翌々日も勝呂医院の所には行かなかった。左肺の空気は少しずつ減ってきて、段々、息ぐるしくなってきたが、あの医者から針をさされるのがなぜか不安なような気がしてきたからだ。

気胸は普通、胸の側面に畳針ほどの太さの針を入れる。針にはゴムのチューブがつけてあって、そこを通る空気が胸に送られて、空洞を少しずつ潰すというのがこの療法なのだ。私にとってこの治療がイヤなのは針を入れられることではなく、その場所が脇の下だということだった。脇の下は平生、腕で防ぎかくしている部分である。腕をあげて気胸針のさされるのを待つ時、私はなぜか、胸の側面にヒヤリとした冷気を感じてしまう。その冷気にはたしかに腕をあげることによって防ぎようのない状態に身をおかねばならぬ不安がまじっているようである。

かよいなれた医者にさえ、針をさされるのがイヤだから新しい医者にたいしては尚更、心もとなかった。下手な人にかかると自然気胸という突発事を起す時がある。自然気胸を起すと患者は窒息するのだ。私は雨戸から首をだした勝呂医師の何処か蒼黒いむくんだ顔や、暗い陰気な部屋の翳を思いだし、なんだか行く気がしなくなったものである。

とはいえ、いつまでも我儘を言ってはいられない。私の義妹の結婚式が半カ月後、九州のF市であるので、妊娠している妻の代りに出かけねばならなかった。妻は両親のない義妹のたった一人の身寄りなのである。

レントゲン写真を持って行こう、行こうと考えているうちに二、三日たった。

その二、三日後、私ははじめて、ここの風呂屋に行った。土曜日だったから私は午後二時頃、会社から家に戻ってきた。路でトラックに追いこされ白い埃を頭からかぶったのである。

時間が早いせいか湯ぶねのフチに狐のような顔をした男が両手を靠らせて顎をその上にのせていた。こちらをしばらく見つめていたが、声をかけてきた。

「風呂は今頃がいいやねえ」

「え？」

「風呂は今頃がいいやね。遅くなるとこの辺の百姓の子が湯を汚すからなあ。あいつ等は湯の中で小便をするから、かなわねえ」

私は隅の方で体をかくすようにして細い腕とうすい胸を洗いながら、この男が駅に近いガソリン・スタンドの主人であるのに気がついた。いつもは腰の所にバンドのある白い作業服を着てホースなどを持っているから、私にはわからなかったのである。女風呂のほうで子供の泣く声がきこえた。

彼は大きな音をたてて湯槽から上った。壁鏡に彼の狐の

ような顔がうつった。
「ドッコイしょ」と彼は言った。そして桶の上に尻をおいて長い足を洗いはじめた。
「あんたはここへ来て間もないんだろ」
「一週間です。これからお世話になりますよ」
「仕事は何をしている、ね」
「釘の問屋に勤めています」
「会社は東京かね。ここから東京まで通うのは大変だろ」
私は彼の胸に下着の白い跡が残っているのをそっと眺めた。肋骨が少し浮きでてはいるが、いわゆる骨組の逞しい体だ。私のように虚弱な男は同性の体格にたえず劣等観念を抱くのである。マスターの右肩には直径十糎ほどの火傷らしい傷あとがある。その肉のひきつりはカンナの葩のような形をしていた。
「あんたの女房は妊娠らしいなあ」
「はあ」
「この間、駅の方を歩いているのを見たが、随分、くるしそうだったね」
「この辺にいい医者がいますか」
私は勝呂医師でない医者をたずねてみようと思った。私の胸のことはともかく、妻の体のこともそろそろ心配しなければならない。
「勝呂医院がすぐ、そこじゃないか」
「腕はいいんですか、あの先生」
「悪くないって話だぜ。無口で変った医者でね」
「変っているようですね」
「勘定をあまりやかましく言わねえしな。ほっといても黙っているぜ」
「昨日、行ったけれど雨戸をしめていましたよ」
「そりゃ、カミさんが子供をつれて東京に出たからだろ。カミさんはむかし、看護婦だったそうだがね」
「もう此処に住んでから長いんですか」
「誰が？」
「あの先生」
「でもないだろう。俺んとこよりは、先らしいねえ」
彼の足もとからねずみ色の汚水が流れてきた。体をこすっているその右腕がしきりに私の顔にあたる。赤く上気したその肉塊は湯とシャボンで細長い風船のように光りはじめた。羨ましい。右腕のつけ根でさっきの火傷の痕が少し白くふやけてきたようにさえ見える。
「火傷ですか。それは」
「なに？　これか。迫撃砲だよ。中支でね、チャンコロにやられてね。名誉の負傷さあ」
「痛かったでしょう」
「痛いの、痛くないのじゃないね。真赤に焼いた鉄棒で思い切り、ガアンと撲られた気持さ。あんたは兵隊にとられたのかい」
「終戦前――一寸。すぐ帰りました」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ふん。じゃああのチャンコロの迫撃砲の音を知らないな。シュル、シュル、シュルと鳴りやがって、さ」

私は自分が応召した鳥取の部隊を思いだした。うす暗い内務班でこのマスターと同じ型の狐のような顔をもった男が幾人も坐っていた。私たち新兵を苛める時、彼等の細ながい象のような眼はまるで微笑でもしているようだった。あの男たちも今はどこかでガソリン・スタンドの主人になっているかもしれない。

「中支に行った頃は面白かったなあ。女でもやり放題だからな。抵抗する奴がいれば樹にくくりつけて突撃の練習さ」

「女を？」

「いや、男さ」

彼は頭にシャボンをつけて、こちらに顔をむけた。はじめて私の白い痩せた胸や細い腕をみたように、ふしぎそうな眼つきをした。

「痩せているな、あんたは。その腕じゃ人間を突き刺せないね。兵隊では落第だ。俺なぞ」と言いかけて彼は口を噤んだ。「……もっとも俺だけじゃないがなあ。シナに行った連中は大てい一人や二人は殺ってるよ。俺んとこの近くの洋服屋――知っているだろう、――あそこも南京で大分、あばれたらしいぜ。奴は憲兵だったからな」

どこかでラジオの流行歌が聞えてきた。あれは美空ひばりの声である。女湯ではまた子供が泣いている。

体をふいて「お先に」と言った。脱衣場の所で一人の男がうしろむきになってシャツをぬいでいた。勝呂医師だった。彼は眼をしばたたきながら私を眺めたがすぐ視線をそらした。先日のことを覚えているのか、覚えていないのかわからない。午後の陽が医師の額にあたって、そこに小さな汗粒が幾つも浮いていた。トマト畠の中を通って帰った。キリギリスがあちらこちらで、かすれた声をあげて鳴いている。それを聞いているのはひどく息苦しかった。

洋服屋の前を通りかかった時、私は足をとめた。ガソリン・スタンドの主人が言った言葉を思いだしたからである。ショオウィンドオは相変らず埃に白く汚れている。店のなかで男がうつむいてミシンをふんでいた。顴骨がとび出て眼のくぼんだ男だ。この男が南京で憲兵をしていたのだろうか。しかしよく考えてみると、これもよくある顔なのだ。鳥取部隊の内務班でも私は古参兵や戦友のなかにこの種の農民的な顔をよく見たものである。

「なにか用かい」

「いや、あまり暑いので」私は狼狽した。「大変ですね。お仕事ですか」

「いやあー」洋服屋は案外人なつこく笑った。「こんな田舎ではあんた、とてもとても……」

ショオウィンドオの人形は例によって空虚な謎めいた微笑をうかべていた。碧い二つの眼が一点を注目しているように凝視している。

折角、風呂屋に出かけたのに、また、汗まみれになって家に戻った。妻は膨らんだ腹を両手でだくようにして縁側に坐っていた。
「おい、スフィンクスって知っているだろう」
「何、それ？」
「あの玉蜀黍畠の所に洋服屋があるだろう。ショオウィンドオに人形がおいてあるんだ。西陽があそこに照りつけてね。あの人形のうすら嗤いを見てたらエジプト砂漠のスフィンクスを思いだしたのさ」
「莫迦なこと考えずに早く医者に行って下さいよ」

妻があまりやかましく言うので僕はその夕暮、レントゲン写真をもって勝呂医師をたずねた。雨戸はまだ閉めきったままで、庭には子供の長靴がやっぱり落ちていた。犬小屋も空のままだった。細君がいない間、勝呂医師は一人で自炊しているらしかった。
家の中にも診察室にも垢臭い変な臭いがこもっている。ここに来た患者たちが溜めていった体臭なのか、それとも薬の臭いかわからない。窓を覆った白いカーテンの真中が裂けていて、なかば陽に焼けている。私は勝呂医師の診察着に小さな血の痕があるのを見てイヤだった。
ひびのはいった空ベッドに私が横になっている間、彼は眼をしばたたきながらレントゲン写真を眼の高さまであげて眺めた。カーテンを通して射しこんでくる光線がむくんだその顔を照りつけている。
「前の先生には四〇〇CC空気を入れてもらったのです」
勝呂医師は返事をしなかった。私も彼が机の引き出しから気胸針のはいった硝子瓶をとりだし、先端の穴を調べ、ゴム管にとりつけ、麻酔薬の注射管をつまむのをジッと見詰めていた。彼の毛の生えた太い指が芋虫のように動いていく。その指先には黒い垢がたまっている。
「手をあげて」と彼はひくい声で命じた。
彼の指が私の脇腹の肋骨と肋骨との間を探っていった。針を突きさす場所を確かめているのだ。その感触には金属のようなヒヤリとした冷たさがあった。冷たさと言うよりは私を一人の患者ではなく、なにか実験の物体でも取扱っているような正確さ、非情さがあった。
（前の医者の指先とちがう）と私は患者の本能で突然怯えはじめた。（あれはもっと暖かかった）
その時、私の胸部に針がはいった。肋膜と胸廓との間に針がすべりこむのがハッキリ感ぜられた。みごとな入れ方だった。
「ウム」と私は力んだ。
勝呂医師はその声が耳にはいらぬように窓の方を眺めていた。彼は私などではなく別のことを考えているようだった。

無口で少し変った先生だとガソリン・スタンドの主人が批評していたが、勝呂医師はともかく、少し変っていた。「愛想がないのよ。そうよ。そういう医者はよくいるものよ」と妻は私に言った。

「そうかなあ。とにかく、あの気胸針の入れ方はこんな田舎医者には珍しいね。どうして、こんな所に住んでいるのかね」

気胸針を患者の胸に突きさすのは何でもないようだが、あれでなかなかムツかしいのだと私は経堂にいた時、通っていた老医から聞いたことがある。

「若いインターンなどに委せられませんよ。針をちゃんと入れるようになったら熟練した結核医ですな」

その老医はむかし、長い間、療養所で働いたそうだが、ある日、しみじみそう説明してくれた。針が新しければ痛みも少ないが、先のまるい針を厚くなった肋膜の奥に素早く刺すには力の加減がいる。時には自然気胸を併発させたりする場合もあるのは先にも書いた通りだが、そんな突発事を起さなくても、一打ちで針をしかるべき部分まで突き入れなければ患者が痛がる時があるものだ。

私の経験から言っても経堂の老医でさえ、月に一、二度は肋膜のあたりで針を止め、改めて更に突きこむことがあった。こんな時、胸に鰒のはいったような痛みが走るのである。

あの勝呂医師にはこんなことは一度もなかった。彼の一打ちは素早く針を肋膜と肺の間に入れ、そこでピタリと止めるのである。痛みも何もなかった。アッという瞬間にすむのだった。もし経堂の老医の言うことが本当ならば、この蒼黒くむくんだ顔の男はどこかで相当、結核の治療にたずさわっていたのだろう。そんな医師ならば何も好きこのんで砂漠のような土地に来なくても良さそうなのに、何故やって来たのか私にはふしぎだった。

けれどもそうした技術のみごとさにかかわらず私にはこの医者が不安だった。不安というよりいやだった。こちらの肋骨をさぐるたびに触れるあの指の硬さ、金属をあてられたようなヒヤッとしたあの感じは私にはうまく表現できないが、何か患者の生命本能を怯えさすものがある。私はそれがあの芋虫のような太い指の動きのためかと思ったが、それだけでもないようだった。

ここに引越してから一カ月近くたった。九月の下旬には義妹の結婚式のため九州に行かねばならぬ。妻の下腹は眼にみえて膨れていく。

「横にひろがるから女の子かもしれないわね」と彼女は産衣を頬に当てながら嬉しそうに呟いた。「蹴るのよ。時々お腹を蹴るのよ」

ガソリン・スタンドの主人は相変らず白い作業服を着て注油器の前を歩きまわっている。私は会社に出かける時、彼に挨拶をする。時々たちどまって無駄話をすることもあ

る。風呂屋では彼のほかに洋服屋の主人にも会うことがある。私はこれで病気さえ良くなれば倖せなんだと思うことがあった。子供もでき、小さいながら家もでき、平凡な倖せかも知れないが、それでいいのだと考える。

ただ勝呂医師のことだけが妙に私の好奇心を唆った。細君はまだ帰ってこないのだろうか、相変らず雨戸は閉めきったままである。庭に落ちていた子供の赤い雨靴は犬がくわえていったのか、何時の間にか無くなっていた。

ある日、私は彼について一寸した知識を仕入れることができた。たしかにここに来てから五回目の気胸の日だったが、順番を待っていた私は玄関においてある古い週刊誌の間にF医大の卒業名簿という小冊子を見つけたのだ。勝呂という姓名は珍しかったので、彼の名はすぐ確かめることができた。それよりも私を驚かせたのはその医大のあるF市が九月の終りに妹の式で行かねばならぬ都市だったことである。

「あの訛りは九州のF市の言葉なんだね」と私は妻に教えてやった。

「なんの訛り？」

「そら、初めて俺が行った日、レントゲンを忘れて言われたろう。レントゲンがなかとなら――って」

妻も私も東京生れだから本当にそれがF市の言葉であるかわからなかった。けれどもその発音がいささか滑稽だったので私たちは笑いだした。

「カミさんに逃げられたんじゃねえかな。あの医者」と風呂屋でガソリン・スタンドの主人は考えこんだ。「そう言えば、もとの看護婦に手をつけたという話だからな」

「たしかに変人ですね」

「変ってはいるがこちらには都合がいいさ。去年俺の子供が病気してね。診てもらったんだがその代金、まだ要求してこないからな」

「逃げたという奥さんはどんな人でした」

「なあに。亭主に似て血色のわるい女だったよ。ほとんど顔をみせないし、駅の方に出てくることもないし――」

気胸のたびに私が彼の家を訪れても、勝呂医師はほとんど口をきかなかった。引き裂けた白いカーテンの色が次第に陽に焼けていくのがハッキリわかったが、何時までもそのままにしてある。患者は百姓の内儀やその子供が多い。彼等は玄関の上り口に腰をおろして患者用の新聞や週刊誌をめくりながら忍耐強く順番の来るのを待っていた。看護婦がいないので薬の調合も勝呂医師がやるのである。

残暑のひどく厳しい夕方、私が国道を一人でぶらぶら散歩していた時、ステッキを持った勝呂医師が路ばたにたちどまっているのを見たことがある。彼は洋服屋のショオウィンドオを覗きこんでいるのだった。

私が近づいたのに気づいた医師は、視線をそらして歩きだした。私が頭をさげると彼はただ黙礼しただけであった。

ショオウィンドオは例によってトラックの白い埃をあびていた。洋服屋の姿は見えなかった。赤い髪をした白い人形はうすい嗤いをうかべたまま、こちらを凝視していた。勝呂医師がたちどまってジッと見つめていたのはこのスフィンクスだった。

九月の終り私は長い退屈な汽車に乗って九州のF市にむかった。義妹の結婚式のためである。

出発前、胸に空気を入れてもらったが彼には旅行のことを相談しなかった。どうせ相談したところで相手が返事らしい返事をしてくれる筈はないからである。

義妹は東京の勤め先で知りあった会社員と恋愛結婚をしたのだ。男の家がこのF市なので式もここですることになったのである。身寄りの余りいない義妹には親類のうち出席したのも親代りの私だけだったから肩身のせまい思いをしただろう。

私の方もF市に来た日から東京に帰りたくなった。水の街という話はきいていたが、その街の中心を流れる那珂川も真黒でドブ臭かった。その黒い水の上に仔犬の死骸やふるいゴム靴が浮いていた。私は勝呂医院の庭や診療室の臭いを思いだした。住む人の言葉もたしかにあの医者の訛りがあった。私は彼にもこの河をみたり、街を歩いたりするような医学生時代があったのだと思って可笑しかった。

披露宴は街の中心にある小さなレストランでやった。義妹の主人になる男は背のひくい、善良そうなサラリーマンだった。私とおなじように朝の新宿駅で電車を待っているあの無数の勤め人の一人である。やがて義妹も子供ができ、この男と何処か郊外の安い土地に小さな家を建てて私と同様、平凡な倖せを楽しめばいい。何もないこと、何も起らないこと、平凡であることが人間にとって一番、幸福なのだと私は彼等をみながら、ぼんやりと考えた。

テーブルで私の隣には新夫の従兄だという人が坐っていた。この人もやはり背が低かったが、体は太っていた。名刺をもらうと医師と書いてある。

「F医大を御卒業ですか」話の種がないので私は勝呂医院でみた小冊子のことを思いだしながら訊ねた。「それならば勝呂という人を御存知ありませんかね」

「勝呂……勝呂」相手は首をかしげた。一、二杯の酒でその顔は真赤だった。

「勝呂二郎ですと?」

「はあ――」

「勝呂をあなた、御存知ですと?」

その人は早口のF市弁で叫んだ。

「体を診て頂いています。気胸をやっているもんですから」

「ほう……」

その人はしばらく私の顔を見つめていた。

「今、東京に彼、おりますとな。それでは」
「学生時代のお友だちですか。勝呂先生と」
「いや、あの人は……御存知か知れませんが、例の事件でな」
その人は急に声をひそめて話しはじめた。

披露宴が終ると義妹は夫と駅にむかった。私は親類たちとステイションまで彼等を送った。街には雨がふりだしている。新婚夫婦たちがたち去ったあと、一同は急に手持無沙汰になりはじめた。むこうの家族が料理屋へ誘ってくれたが私は疲れたからと言って宿屋に帰った。
宿屋には客がほとんどいない。女中が布団をのべて出ていったあと私はあぐらをかいて長い間、喫わなかった煙草を幾本もすった。
布団にはいって眼をつむったが眠れなかった。披露宴であの従兄という人が小声で教えてくれた勝呂医師のことを考えつづけた。雨が屋根を叩く音がきこえる。宿屋の遠くで暇な女中たちが笑い声をたてている。
うとうとと眠ってはすぐ眼がさめた。闇の中で勝呂医師の蒼黒くむくんだ顔と、あの毛のはえた芋虫のような指がチラついた。あの指でさわられた冷たい感触がふたたび右腕の皮膚の上に蘇って来る。
翌日も雨だった。午後その雨の中を私は街に出てF市の新聞社をたずねた。
「むかしの新聞を見せて頂きたいんですが」
受付の女の子は胡散臭そうに私を見つめていたが、それでも資料課に電話をかけてくれた。
「いつ頃の記事ですか」
「戦争直後のです。戦争中、F医大で生体解剖をした事件の裁判があったでしょう」と私は答えた。「あの時の記事を見せてもらえませんか」
「紹介状は持っとられますか」
「イヤ、それがないんです」
三階の資料課の隅で私は一時間ちかく当時の新聞記事を読ませてもらった。
それは戦争中、ここの医大の医局員たちが捕虜の飛行士八名を医学上の実験材料にした事件だった。実験の目的はおもに人間は血液をどれほど失えば死ぬか、血液の代りに塩水をどれほど注入することができるか、肺を切りとって人間は何時間生きるか、ということだった。解剖にたち会った医局員の数は十二人だったが、そのうち二人は看護婦である。裁判ははじめはF市で、それから横浜で開かれている。私はその被告たちの最後の方に勝呂医師の名をみつけた。彼がその実験中何をやったかは書いていない。当事者の主任教授はまもなく自殺し、主だった被告はそれぞれ重い罰をうけていたが、三人の医局員だけが懲役二年でいんでいた。勝呂医師はその二年のなかにはいっている。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com